

16. 分娩監視システム導入農家の生産性向上への取り組み

西部振興局 生産流通部

○白根英治

1. 背景・目的

肉用牛繁殖経営の多頭化が進んだ結果、家畜個体当たりの観察時間が減少しており、発見の遅れによる分娩事故の発生や初生子牛の損耗等による生産性の低下が増加し、これを改善することが課題となっている。

この課題の解決のため、振興局管内の繁殖農家に対して、センシング技術を用いた分娩監視システムの導入を支援したので報告する。

2. 取り組みの内容

(1) 設置までの経緯

- ・技術研修会を開催して、メリットや改善ポイントを整理
- ・県内の実証展示を活用した研修会、牧場での現地検討会開催
- ・初期経費、ランニングコストの検討

(2) システム導入

- ・レイアウトの検討、電波通信範囲の確認等、牧場施設への設置
- ・運用の実際、役割分担で対応する体制構築

3. 活動の成果

分娩監視システムからの通報により、ほとんどの分娩立ち会いが可能となり、牧場主及び雇用者の監視作業省力化が図られると共に、分娩予測により、分娩舎の清掃など牛舎環境の整備を行うことが可能となった。

同時通報によって牧場主等の複数の作業者が分娩予測の情報を共有できるようになったことから、本システムの導入によって分娩監視作業の省力化に大きな効果が得られた。

事故率等の変化については、導入前後に大きな差は認められなかった。

4. 残された課題

家畜個体によっては、膣内の挿入センサーが外気に触れ、誤報（破水情報）が発生するなど、対応に苦慮するケースがある。

また、通知から分娩開始までの時間分布は個体毎のばらつきが大きく、精度の向上が求められる。特にこの点は、多くのデータを管理する事業者へ改良を求めている。

本システムは本年度、管内農業高校にも導入され、肉用牛の新技術の学習教材として運用が始まっている。今後、さらなる普及・定着を目指し、導入農家等で得られた知見を広く活用していきたい。